

亡者は四百四十五人に及び全体の四七%にもなり、先程申し上げたような状況で、本当にキチツと埋葬されたか疑問に思う次第です。

私は怪我が重なって幸に生きて帰ることができましたが、ウラン・ウデの病院で家族のことを心配し、兄弟のことを思い、生きて帰りたい一心で、配給になった黒パンを握りしめながら、胃腸障害や栄養失調で亡くなった戦友の話の聞くにつけても、誠に感慨無量のものがあります。

このような悲劇を私達の子や孫に経験させることのないよう努力しなければならぬと誓い、皆様にもお願い申し上げる次第であります。

シベリア抑留記

滋賀県 角田 武雄

滋賀県米原市中多良に生れる。

大正九（一九二〇）年六月八日生れ。昭和九（一九三四）年三月米原尋常高等小学校を卒業。昭和十年十二月に国鉄大垣駅に就職。家業の百姓は父母と姉妹で行う。昭和十六年九月に東部一〇三部隊に徴兵で入隊、六カ月の教育を経て、満州九六部隊に転属のため、昭和十七年二月満州寧安に到着。以降、満州国内各地通信所に勤務。

昭和二十年八月九日「ソ連」侵攻で、急遽寧安を連隊本部と共に脱出。事前に準備は出来ていなかった故、少々の機械で情報を取りながら南下。新京（長春）に立ち寄るが、もぬけの空で、再度列車に乗り南下。安東の手前で下車。徒歩にて安東に向い、安東にて武装解除される。九月の初めごろまで滞在するが、別に「ソ連」軍が監視する

のでもなく、現地人が騒ぐのでもなく、毎日の食事等にも事欠くことも無く、明日「ソ連」にどこかに連れて行かれるか、また皆別々に離散させられるか分からないと言うこと故、最後の酒盛で一夜を明かす。安東から奉天（瀋陽）まで、奉天にて作業大隊が編成されて、有蓋貨車に乗せられ北へ進むが中々進まない。前が進まないのか、機関士がいないとかで、黒河に着いたのは十月の終りころで、黒龍江を鉄舟を繋ぎ合せた橋を渡って十一月初め「ソ連」に渡る。ブラゴエシチェンスクに着く。一日か二日滞在して以降シベリア鉄道有蓋貨車に積込まれて、東京ダモイと騙されて、北上してシベリア鉄道に乗って分岐点まで。太陽が西から昇り東に沈む光景はまた不思議。この旅も長い旅であった。一面草原の様子、満州も広いが桁が違う。もう望みも無い。望みを持っていても仕方がない。なるようにしかならない。自分の体を自分でしっかり守るのみ、帰るまではと思つた。随分と長い間乗っていたように思うが、日時

は分からない。下車した所で満州から持って来た種々の荷物をほとんど取りあげられてしまった。またかくした大切な品々を身体検査までして取り上げられてしまった。時計等でも五個六個と取り上げていた兵隊がいた。今まで見たことも無い品々を本当に子供のように喜んでいる兵隊ばかりで、「独ソ」戦で「ソ連」も多数の犠牲者を出していたので、当然のこと故、無情だと思つた。またこのような兵力に屈したとは日本も何をしていのかと思つた。このような兵隊に「ダバイ」「ダバイ」と言われなければならないのか、残念で残念でならなかつた。また下車した駅から出発するのに十人ずつ数をかぞえるのに手間がかかつて大変で、こんな兵隊に日本が負けなければいつも思つた。行軍の途中でも騎馬に追われ、軍用犬に追われて、「ダバイ」「ダバイ」で遅れることができないので大変であったが、二、三日後軍用貨物車で運ぶようになり山奥のバイゴルまで運ばれる。着いた所は建物は古く中は低く二段式になってい

る。最近まで囚人が収容されていた建物とかのことであった。中は二段式になっていたが、狭い場所ので横向きに体を置かなければ寝られないと言うことで大変だった。その上、衣服類の洗濯も出来ず、「シラミ」につかれて大変だった。当時のシラミの治療跡が「あざ」になって残っている。当時入浴も無く、洗濯する所も無く、どうする事もできなかった。衣服の消毒、入浴等は随分と日時が経過してから定期的に行われるようになる。

酷寒の外の作業は大変であった。川や湖等はすべて氷に覆われて体に感じる寒さは格別であった。外に出れば素手で出ているものはすべて凍りつく有様だった。作業も零下二五度が限度で、以内は朝から作業と、以上は午前中待機であった。最初は川の氷を爆破させるための穴を掘る作業で、一穴を掘るのに大変な作業であった。体を防寒具でかためている訳でもなく、凍傷にかかった人も何人かいた。また、炭鉱等多数の人々が作業に行かれたが大変だったと思う。

二十一年五月に腸チフスを患い、一カ月半隔離され、退院後原隊に帰ること無く、ウランウデの収容所に入所。ここは町中に近い所であった。作業が割合軽作業につくことが多いように感じた。

ノルマについてもうるさく言葉で云わなかったように感じた。我々がそれだけの仕事をする事が出来たからだと確信していた。労役に就くのに基準はなかったように思う。現場の指示に従うだけ、出来ないことは「ノー」サインを送ったように思う。このようなことでもトラブルは無かったと思う。労役に堪えられない者は軍医等が決められていると思われるが、健康の管理は、与えられる物は皆同じであるから欲張らないこと、着衣等は冬夏同じ物で一枚か二枚重ねるかの違いだけで寒い寒い冬を過ごす。

食事類は一日三回朝昼晩であったが、米は一度も食したことはなし。肉も一度も食したことはなし。野菜は時々、食物の不足分は補うもの無し。休日とは与えられていた。特別休暇一週間を七人ほどが

皆に見せるためで休養させてもらった。ラボーターハラシヨだった。忘れることが出来ない思い出である。収容所の施設は最初の収容所と比較して立派であった。いろいろなことは多々あるが難しく考えないように、ただただ日本に無事に帰り親達の顔を見るまではとの信念で、種々な苛酷を乗り越えたのだと思います。

ナホトカに着いて、もう帰ることができるはずがまた一カ月作業に出されて、本当に「ソ連」という国は信用できない。ナホトカまで来ても帰ることができなくてまたバックになった人々もあるとのこと。本当に日本の船に乗り、動いて初めて帰ることができたということでした。本当に乗船して動き出した時の心臓は……言葉では表現出来ませんでした。皆さんが喜び合いました

九月二日舞鶴港上陸、これで本当に日本に帰ることが出来たのだ。長かった、よくぞ無事に帰れたのだった。

帰国後の職場復帰は大変だったが円満に復帰で

きた。当時は過剰で皆大変だったが、当時百姓で米作のお蔭で割合よい生活ができたのではと思う。よくぞこの歳まで生きさせてもらえたと、感謝の日々を送らせていただいています。